

入試前課題講評 国際文化学域

今回の課題は、次の3点の中から1点を選んで著者の見解を要約し（400字程度）、それに対する自分の考えを具体的な根拠を挙げながら論じる（800字程度）というものでした。

- ①『森と川—歴史を潤す自然の恵み』（池上俊一著、刀水書房）
- ②『世界一周の誕生—グローバリズムの起源』（園田英弘著、文春新書）
- ③『シェイクスピア—人生劇場の達人』（河井祥一郎著、中公新書）

課題提出者72名の選択の内訳は、①：14名（約20%）、②：7名（約10%）、③：51名（約70%）となり、選択に大きな偏りがありました。

これには、②はやや古く、また①は価格が他より少し高く、③の方が簡単に手に入るという事情があるかもしれませんが。あるいは、片やシェイクスピアは具体的な人物でイメージしやすく、片や自然、グローバリズムは抽象的でとらえ難い、前者の方が断然取り組み易い（と見える）ということでしょうか。特に歴史よりは言語・文学・芸術に関心があるという人には、シェイクスピアなら名前位は知っていることもあって、③が選び易いでしょう。

でもこの「選び易さ」が曲者（くせもの）で、安直・安易な選択に流されてしまった人が多かったのではないかと思います。もちろん決めつける訳ではありませんが、こうした否定的な推測をせざるを得ない位、極端な偏り方でした。実際、残念なことに、「課題を十分こなした」といえるのはごく少数にとどまりました。それは以下に述べる通りです。

大学生となる皆さんには、多くの方が何に関心を持つか知ったうえで、あえてあまり人が注目しない事柄に注目する学び、ないしは同じ事柄に対して人と異なる見方を取れる学びを期待します。そのような自分にしかできない学び・研究が、大なり小なり似たり寄つたりの生活をしてきたら皆さんに（数年の海外経験があった人もいますが）、どうしてできるのでしょうか。そのためには、まずは本を読むことです。ところが、皆さんのほとんどが他の参考文献を使っておらず、当然そういう人は、課題図書 of 著者に同意する（というより引き込まれてしまう）か、あるいはありきたり・独りよがりの意見をつぶやくしかできませんでした。

課題書以外の文献（ウェブサイトを含む）を使用した者はわずか17名（約24%）で、内訳は、①：4名（選択者の約29%）、②：3名（同約43%）、③：10名（同約20%）でした。特に③を選んだ者で参考文献を使用した人の割合が低く、上で否定的な見解を述べた理由はここにあります。どれだけの人が今回の課題を仕方なくさせられることなく、自ら学ぶ好機と考えたのでしょうか。例えば③を論じるなら、この機会にシェイクスピアを（もし読んだことがあっても改めて）読んでみるとよかったです。参考文献使用はたとえ指示がなくても「当然」するべきことと認識してください。

さらに、何を参考にすべきかをよく考える必要があり、論文中で安易にウェブサイトを使用しないよう注意してください。ウェブサイト以外の文献の利用者は10名（約14%）、内訳は①：3名、②：2名、③：5名でした。本来の意味で「課題をこなした」といえるには、課題図書 of 著者が参考にした文献を自分でも読むなど、研究を行う上で信頼できる文献を読み、議論に説得力を持たせることが大切です。

与えられる課題というのはつまらないと思うかもしれませんが。大学生になったらレポート課題は避けられず、好きな・得意な課題ばかりとはいきません。でも参考文献は自分で選べますから、そこに課題の楽しさを見出せる余地が十分にあると考えてください。既に知っていること・経験したことにはばかり頼り、そこを基準にしている、授業も課題も楽しくないでしょう。馴染みのない事柄にこそ関心を持ち、自分の関心事に関して深く、その周辺事に関して広く、どんどん読書するよう心がけてください。ミュージアム等の展示会見学もよいです。今回他の参考文献使用なしの人は特によく反省してほしいです。

以上